

38 地域防災訓練への障害者の参加：3年目の進展

研究所障害福祉研究部 北村弥生、学院児童指導員科 関 剛規
学院手話通訳科 宮沢典子、自立支援局 小泉 貴、浮田正貴

【はじめに】地域における災害時の準備のために、平成24年から所沢市において、市役所、社会福祉協議会、まちづくりセンター、自主防災組織、町内会、当事者、支援者らと行っている地域防災訓練への障害者の参加について、3年目の進展を紹介する。

【方法】所沢市地域防災訓練は、毎年、8月最終土曜日午前に、市内の約20の小学校で一斉に行われる。平成26年度には、国リハに隣接するA小学校には、脳性マヒの青年(20歳代後半)Bさんと全盲女性(60歳代)Cさんに参加を依頼した。午後には、D小学校で避難所設営・避難生活体験訓練が行われ、6名の障害者(電動車いす利用者、手動車いす利用者、杖歩行者、ろう者、弱視者、全盲難聴者)、手話通訳者2名、学院学生4名、地域の盲ろう通訳介助者、学院教官1名に参加を依頼した。参与観察の他、参加者への質問紙法による調査を行った。

【結果】Bさんは車椅子(電動と手動の切替式)を使用しているため、25年度は研究スタッフ4名が体育館の入り口の3段の階段で車椅子を持ち上げた。26年度は、Bさんが属する町内会に車椅子の持ち上げを、市内のボランティア組織代表に指導を依頼した。26年10月には市役所危機管理課から、市内の指定避難所に災害時要配慮者のためには何を備蓄したらいいかの意見を求められたのに対して、「A小学校では、毎年の防災訓練にもスロープは確実に使われること」を回答し、最低限必要な長さのスロープのカタログを提供した。Bさんの両親、A小学校で防災訓練を主催する連合自治組織代表からも市役所に対してスロープの配置が要望され、27年度には2基のスロープが購入された。当日、朝は小雨であったために、Bさんの代わりに参加した父親がスロープの設置位置を確認した。スロープの長さは自走するには短かく、歩行にも急斜面となったため、Bさんの父親だけでなく、市役所職員からも、地域住民からも、「もっと長いスロープが必要だ」という声が多く聞かれた。長いスロープは場所を必要とし、重いことを懸念したが、機能を優先した希望が地域からあがったことへの対応が期待される。また、スロープの設置と片づけは、市役所職員により行われたが、次年度からは、自主防災組織に依頼する方が災害時には早く設置されると考えられる。

Cさんは、25年には研究スタッフが自宅からの送迎、会場での環境認知、町内会長への紹介を行った。27年には、事前に依頼した市の同行援護者と町内会の集合場所に集合し、担当民生委員2名に紹介した。集合の連絡には、回覧板が使えないことから、町内会長にメールで連絡することを依頼した。

D小学校での避難所生活体験訓練では、1)介護用トイレを杖歩行者、手動車いす利用者は使用できたこと、2)杖歩行者には、便袋を片付ける時や靴の履替時に椅子が必要なこと、3)機器運搬用に自主防災組織が自作したスロープでは自走はできなかったが、介助して出入りできたこと、4)地区毎に作成した段ボールの間仕切りは、車椅子利用者のいた区画では出入口が多く作られたことが確認された。D小学校反省会での上記の報告に対しては、スロープ作成者から、「車椅子走行に適切な斜面の角度を教えてほしい」との要望が直後にあり、改善が期待される。